



みち 古道が紡ぐ物語



神武天皇東征の道④（大和盆地に入り即位へ）

宇陀の下県を制した神武軍は、大和盆地を一望できる高城岳の望楼から敵情を探り、宇陀川沿いまで進出する。すでに長髓彦側の勢力も戦の準備を整えており、宇陀と磯城（現在の桜井市周辺）の境にある山間部には、兄磯城、弟磯城という有力豪族や八十猛の軍勢であふれていた。

戦いの様子は日本書紀に詳しく描かれており、神武天皇は「菟田川の朝原」において必勝を祈願した後、巧みな戦術で賊軍を破り大和盆地に入った。ついに仇敵長髓彦と戦うことになるが、金鷄、金色に光る鷄が神武軍を助けてこれを破りヤマトを平定、橿原の地で初代天皇として即位した。

神武軍の進軍と兄磯城・弟磯城

神武天皇は、まず、高倉山から敵勢の様子を探った。この高倉山の場所としては諸説あり、大宇陀守道には山上に高角神社を祀る高倉山がある。ただ、伝承によれば、この高角神社は、南北朝時代に宇陀松山城が築かれた城山（大宇陀春日）から現在地に移されたといい、高倉山は現在の城山とする説も有力である。

高倉山から宇陀と磯城の境、現在の宇陀市と桜井市の境あたりを見ると、経ヶ塚山、音羽山の山麓部一帯である「国見丘」には、八十猛の軍勢があふれていた。この八十猛とは、多くの猛者の意味で、長髓彦の意を受けた敵対勢力である。

兄磯城、弟磯城という磯城を支配する有力豪族の兄弟や、その配下の豪族である兄倉下、弟倉下も峠という峠を押さえている。

朝原の戦勝祈願と宇陀の水銀

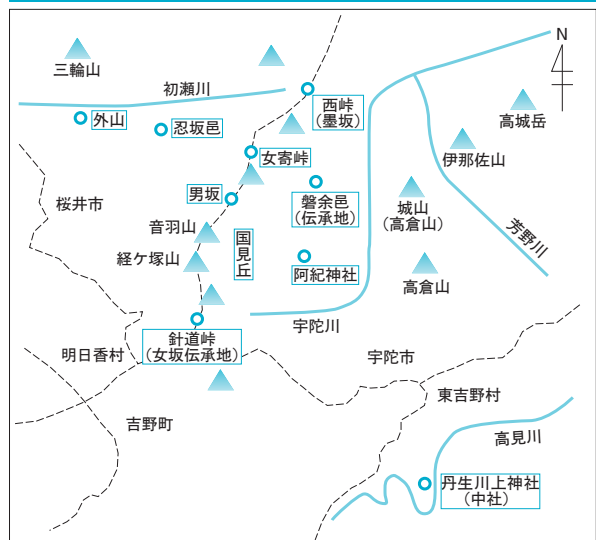
敵軍に行く手を阻まれ苦々しく思っていると、神武天皇の夢に高皇産霊尊（天地開闢の際の神々の一神）が現れ、「天香具山」（橿原市南浦町）の埴土（黄赤色の粘土）で平瓦と厳甕（酒瓶）を作り天神地祇を祀り敬い呪詛すれば、敵は自ずと降伏するとのお告げがあった。

そこで、お告げの通り、敵陣を突破して持ち帰った埴土で器を作り、丹生の川上で天神地祇を祀った。また、菟田川の朝原では「水沫の様にかたまり着くところ」があり、戦勝を祈祷したところ、願いの通り、平瓦で水無しで飴を作り、さらに御



神武軍が拠点とした阿紀神社（大宇陀迫間）。この一帯の阿野野は皇室の狩場として万葉集などにも登場する。

宇陀・桜井地域略図



神酒を入れた器を沈めて酔った魚を浮き上がらせることができ、軍勢の志気は高まった。

ここで丹生川と菟田川の記述が交錯していることから、「朝原」についてはいくつも伝承地がある。

一つは東吉野村の丹生川上神社で、境内には朝原祈祷が行われたとして神武天皇聖蹟碑が建つ。

また、菟田川支流には多くの水銀（丹砂）鉱床があることから、古代には丹生川と呼ばれていた可能性もあり、神戸神社（大宇陀大東）、阿紀神社（大宇陀迫間）、八坂神社（大宇陀本郷）などにも伝承が残る。特に、祈祷の所作が、川底の砂から水銀を採る動作に似ており、精製時に発生するガスの性質から、大宇陀内とする説も有力である。

神武軍の機動戦の展開

神武軍と長髓彦勢力との戦闘の様子は、古事記では多くは語られず、日本書紀に詳しい。

日本書紀では、「くにみのたけ国見丘」にあふれている八十猛軍は「めさか女坂にめいくさ女軍を置き、おさか男坂にはおいくさ男軍を置き、墨坂にはおこし炭を置いた」とある。女坂は、宇陀の南部、多武峰から宇陀に抜ける「針道」の大峠と考えられ、「女坂傳稱地」の石碑が建つ。墨坂は今の国道166号線の西峠あたりである。

男坂とはおおぼら桜井市粟原から「国見丘」・大宇陀に至る半坂峠と考えられており、現在は、近畿自然歩道が通るのみで、「男坂傳稱地」の碑が建つ。

さらに、男坂を桜井側に下ったおしさか忍坂やとび外山の周辺には本軍ともいえる兄磯城、弟磯城と兄倉下、弟倉下の軍勢があふれていた。

この女軍、男軍であるが、女性兵士との見方もあり、また、男軍の本隊に対して、機動力のある陽動部隊といった意味とも考えられ、神武軍を挟撃する作戦であった。

しかし、この意図を見抜いた神武軍は、別働隊を北側から迂回させ、逆に八十猛軍を挟撃し打ち破った。そして、兵が集まりその地にあふれたので、そこを磐余と名付けた。大宇陀岩室の辺りであるといわれる。さらに、接待すると見せかけて忍坂の洞窟に残敵を集め、一斉に打ち取った。

この洞窟で打ち取る説話は古事記にもあるが、大きな戦闘は記されておらず、土蜘蛛（洞窟生活氏族）を打ち取ったとする小規模な戦闘である。

兄磯城を滅ぼし大和盆地入り

神武勢は宇陀と磯城の境まで勢力圏を広げ、八や咫た鳥がらす（賀茂建角身命の化身）を遣わして兄磯城

と弟磯城おとしきに帰順を呼びかけた。

弟磯城はかしこまって神武天皇に帰順したが、兄磯城は兄倉下、弟倉下えくらじを従えてあくまで抗戦の構えで、男坂を下った忍坂、外山（桜井市）に軍勢を集め、墨坂では弟倉下勢が待ち構えた。

そこで、神武勢は陽動部隊を忍坂から攻め入らせ、本隊は北側の墨坂から、宇陀川の水をおこし炭にかけて消しながら攻め入った。その際、本隊は敵に悟られないように芳野川沿いに迂回したが、この時、伊那佐山に張った陣中の様子を歌った神武天皇御製が記紀双方に記述されている。

墨坂、忍坂の両面から挟撃されて兄磯城軍はついに壊滅し、多くの兵士が投降した。一説では、「兵士（磐）が余れり」ということで、この一帯を「磐余」というようになり、神武天皇は自らの名を佐野命から「磐余彦」と改名したという。桜井市慈恩寺のあたりである。

長髓彦と饒速日命

いよいよ仇敵長髓彦との戦いが始まる。今の生駒市高山を本拠としたとされ、伝承地の碑が建つ。

やはり強く、神武軍はなかなか勝つことはできなかったが、ここで現れるのがきんし金鷄、金色に光るとび鷄である。神武天皇の弓先にとまり、敵軍の目をくらませたことで長髓彦をついに破った。

さて、先に天から降臨し長髓彦の妹を娶っているにきはひのみこと饒速日命であるが、日本書紀では、ここで神武天皇が自分と同じ天神の子と知り、長髓彦を討って帰順したとされ、古事記では、すでに菟田の国見岳で帰順して兵を引いたとされる。

その子のたかくらじのみこと高倉下命は熊野で神武一行を助けた後、援軍として加わるなど神武東征で重要な役割を果たしており、元々敵対勢力としては描かれておらず、後の物部氏の祖となっている。

饒速日命の帰順によりヤマトはほぼ平定。そして、神武天皇は大和盆地の真中である橿原に宮を築き、初代天皇、神日本磐余彦火火出見天皇として即位した。「神武天皇」は奈良時代に贈られた漢風諡号である。（終）（山城 満）